

W. Raabe „Stopfkuchen“ 論

—語りの仕組みと読者の立場 (1)

大塚 讓

〈序〉

Eberhard Lämmert は、Ich-Erzähler について次のように述べている。「Ich-Erzähler ならびに体験したことを物語る報告者は、なるほど事物をあきらかに制約されたパースペクティブから見ており、未来の不確かさを体験する。(共時的なストーリーの提示)。だが彼は同時に語り手として、出来事の全体的経過をより後の見地から見通している(後からのストーリーの提示)。

どちらの場合にも、体験する Ich と物語る Ich のパースペクティブが絶えず交錯する。……中 略 ……… 彼 (Ich-Erzähler) は、読者に行為する Ich の目前の緊張と未来への予期を暗示し、別の箇所では再び物語る Ich として直接読者に話しかけることによって、俳優かつ伝達者として二重生活をしているのだ。」¹⁾

ここで取り上げる Wilhelm Raabe (1831-1910) の „Stopfkuchen—eine See- und Mordgeschichte“²⁾ (1891) も Ich-Erzählung の体裁を採っている。南アフリカで農場主として成功したドイツ人 Eduard は、久しぶりにドイツの故郷の町を訪問した後、今は再び第二の故郷へ帰るべく船上の人となっている。彼は今船の上で、ドイツ滞在の最後の三日間に体験した出来事をせっせと書き綴っている。その出来事というのは、友人 Stopfkuchen の住む赤の砦訪問をめぐって彼が体験したことである。彼はこの体験を、もちろん Ich を主語にし、

1) Eberhard Lämmert, „Bauformen des Erzählens“ (J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart, 1955) S. 72

2) テキストは、Wilhelm Raabe. Sämtliche Werke Braunschweiger Ausgabe (Göttingen. Vandenhoeck & Ruprecht, 1969) Bd. 18

また自分が現にいる船の上に視点を据えて回顧するものごとく過去形で書いている。さらには、しばしば回顧を中断して船の上の様子を書き添えたりもする。すっかり Ich-Erzählung の道具立てが揃っているかに見える。読者が、そこに Lämmert の言う「体験する Ich」と全知者として「物語る Ich」の双方がいるものと信じたくなるのも無理はない。だが、手記そのものの中に「語り手 Ich」はいない。そこにいるのは、友人 Stopfkuchen の住む赤の砦訪問前夜から訪問の翌朝故郷の町を立ち去るまでの Eduard、つまり「体験する Ich」のみである。船の上の Eduard は、体験を記録する書き手でしかない。彼は、赤の砦訪問をはさむ前後三日間に自分が出合った出来事とそれに対するその折の自分の感懐とをそっくりそのまま再現しようとしているだけで、全知の「後からの語り手」としてそうした出来事や感懐にほとんど全く介入してはいない。ごく例外的に必要な最小限の場景描写が挿入されたり³⁾、また Stopfkuchen 風に韜晦した ironisch な表現を纏って船の上にいる彼の視点がひとつふたつ秘かに紛れ込んでいる⁴⁾以外には。

語り手 Ich の視点を巧妙かつ周到に伏せた体験する Ich およびその身近かで起った出来事（主に Stopfkuchen の談話）の再現、これが本稿のこの作品の読み方についての仮説である。こう読まなければ、この作品のほとんど一行たりとも本当の意味では理解できないだろう、というのが筆者の考えだ。そして難解といわれるこの作品も、この観点に立ってはじめて理解を困難にしている諸々の仕掛けをも含めて、その作品世界の全容をほぼ見通すことができるのではないかと思われる。

我々は、第一章において「語り手 Ich」の存在を錯覚させる時間的擬制、「書き手が今いる船の上」の正体を見極めるために、この作品における時間の仕組みを考察し、第二章では、手記の中の Ich の視点がすべて登場人物 Eduard のものであることを見届けたい。第三章では、この手記が過去の再現であることを示すいくつかの指標（文体等々）、および再現という手法から帰結する作

3) その折の Ednard の心境と切り離された数少ない例外的な場景描写の典型は、S. 165-166 の酒場内部の描写に見出される。

4) S. 47. 詳しくは第二章（四）の最後の部分を参照されたい。

品の独特の鞞晦構造を、第四章では、この作品において作者が故意に読者を誤読へ導こうとする語りのトリック、および Philisterkritik を中心とする隠された根本モチーフを、それぞれ考察してみたい。(次号以後に掲載を予定している第三章以下の構成については若干の変更もありうる。)

《第一章》時間の仕組み

読者をしてこの手記の中に「語り手 Ich」がいるものと思込ませる上で、たびたび現われる船の上の場面、この手記を書いている Eduard が現にいる船の上の場面が大きな働きをしているであろう。手記そのものにおける語り手の不在を論証するためには、この思わせぶりな時間の使い方の正体を見極めておかなければならない。だがそのためには、この小説に現われたすべての時間現象を通観し、その中にこの「船の上の場面」を位置づけて考察しなければならない。

この作品には三つの時間レベルが見られる。第一に書き手 Eduard が今いる船の上 (Schreibebene, 以下 SE と略記)、第二に彼が船に乗り込む前の、赤の砦訪問をはさむ前後三日間 (Besuchsebene, 以下 BE と略記)、そして第三に BE において彼によって回想されたり、また Stopfkuchen やその妻 Tinchen による回顧談として物語られたりする、彼らの少年時代や Kienbaum 殺しの容疑によって呪われた赤の砦の歩みや真犯人 Störzer の告白等 (Erinerungsebene, 以下 EE と略記)。

これら三重の時間レベルの間には、前の時間レベルが後の時間レベルによって「今」として再現される、という独特のメカニズムが働いているように思われる。まず SE の Eduard は、BE に没入することによって、そこにおける自分の刻々のありようや、Stopfkuchen や Tinchen が物語ったことを克明に再現しようとする。さらに BE の赤の砦訪問以前の Eduard は、EE に没入し、かつての Störzer や Stopfkuchen の姿を具体的なシーンとしてありありと想起する。(もちろん、これらのシーンは、SE の Eduard によって BE における自分の体験としてそっくりそのまま記録される。) また、BE の Stopf-

kuchen や Tinchen は、EE における様々な（その多くは悲惨な）出来事を、直接引用を多用する語り口によって、生き生きと描き出す⁵⁾。

例えば、赤の砦訪問に先立つ Eduard による EE の回想においては、二重のそれ以前の時間への没入の様が見られる。懐しい赤の砦の前に立った BE の Eduard は、かつて大学入学直前に Stopfkuchen と二人でこの砦にやって来た日 (EE) の回想へと落ちてゆく。彼は、この日はじめて赤の砦 (当主 Quakatz が Kienbaum 殺しの嫌疑を受けており、そのため近隣から爪弾きにされていた) の荒れすさんだ屋敷内の様子を目の当りにし、またデブで怠惰で食いしん坊ほどにしか思っていなかった Stopfkuchen と、殺人容疑に苦しむ父 Quakatz 同様世間への敵意を剥き出しにしていた砦の一人娘 Tinchen とが、実は恋仲の間柄であるのを知る。彼は恋人同士の熱烈な別離のシーンを前にすっかり上気して呆気にとられて突っ立っている。「私が再び目を上げると、歳月が過ぎ去って、大海の大波が船の下でうねりを繰り返し、ひどい横揺れや上下の揺れもなく快調に目下船を希望峰へ向けて運び続けている、という以外には何事も起ってはいなかった⁶⁾」。Eduard は、この時、この EE のシーンを回想しているはずの BE の我に帰るのではなく、BE を飛び越えて一挙に SE の我に帰っているのである。この一足飛びの SE への帰還は、EE における自分のなはだしい狼狽ぶりに、それを回想しているはずの BE の自分を差し置いて、これを記録している SE の Eduard がいかに深く同化していたかを示すばかりではなく⁷⁾、これら三つの時間レベルの間の移動がかなり自由であることを

5) この二人の語りは、Ich-Erzähler が消去されたと見られるこの手記の中であって、時に、逆説的にも、真正の Ich-Erzählung の観を呈することがある。その極め付きは、S. 166-193 の Stopfkuchen による Kienbaum 殺害事件の真相暴露である。

6) S. 49

7) S. 40 にも同様の例が見られる。「大海の大波が再び『Hagebucher』号の客となっている私を新しい故郷に向かって運んでいる最中に、次のように問いかけるのは Stopfkuchen である」。だがこの例は S. 49 の場合とは若干ニュアンスが異なる。この例は、EE の Ednard が赤の砦の荒れすさんだ様子に啞然として見入っている最中に、傍らの Stopfkuchen に突然声を掛けられてハッと我に帰る、これに呼応してこの EE の自分に同化して書いている SE の Ednard も、同様にほんの一瞬船の上の我に帰っているがすぐにまたに戻ってゆくという事情を示している。これに対して S. 49 の例では EE の自分から船の上の我に帰った SE の Ednard は、EE の回想から我に帰った BE の自分へ戻ってゆく。

示している。と同時にこのことは、SE がそれ自体存在感の稀薄な、ほとんど単に BE や EE への没入から帰還される時間レベルにすぎないことをも裏書きしている。

Eduard は、肉体的には船の上にながら、その精神はほぼ完全に BE や EE に行ったままである。例えば彼は、BE のある事柄が SE の同様の事柄を連想させる時、ふっと我に帰る。彼は、赤の砦上で Stopfkuchen の退屈きわまる昔語りを我慢して聞きながらひたすら昼食の時間が来るのを心待ちにしていると、丁度そこへ Tinchen が現われて食事の用意が整ったことを告げる。彼は、ここで船のまずい食事のことを思い出して我に帰り、「赤道直下に差し掛った今日、私はコックが鳴らす食事の合図の鐘の音を聞き逃したわけではなかったが、出掛けては行かなかった⁸⁾。」などとぶつぶつこぼしているという具合だ。また時には、彼は、今日はあまりにひどく船が揺れるのもうこれ以上書けない、だがこんな何も手につかない悪条件の折に、赤の砦の Stopfkuchen の話に耳を傾けることができるのは実にありがたい、などと言ってまた BE の回想へ戻ってゆくというミスを犯したりもする⁹⁾ (なぜなら、書かれなければ手記は存在しないはずだから) が、BE が没入される時間であり、SE が時折ちょっと立ち寄られる時間である、という時間現象のメカニズムがかえって鮮明に現われているとも言える。

また、Eduard が Störzer の棺の側に立って故人となった恩人の冥福を祈っていると、傍らの Stopfkuchen が Störzer と事件との関係を仄めかす。

『『なんだって?』と私が仰天して尋ねると、Stopfkuchen は言った、『そうなんだ』

*

船長は、私も長いこと船に乗っていますが、あなたのようなお方(彼は英語風に Gentleman と言った)にはついぞお目に掛ったことがありませんよ、と確信を込めて言った。彼は私をデッキへ連れ出して、私にも船の風下の側に姿

8) S. 73

9) S. 101

を現わした Angra Pequena 連山を見せようと、わざわざ降りて来てくれたのであったが、私は『すぐ行きます』と答えたきり行くのを忘れてしまい、この律気な老人に私があの連山をすでに見たことがあると伝えることさえしなかった。——私は彼の手を掴もうとした、船長の手ではなく Stopfkuchen の手を。するとその時……………¹⁰⁾。見られる通り、BE の緊迫した場面とその折の自分の緊張しきった心理状態に一体化している SE の Eduard のところへ、折悪しく船長がやって来たので、彼はやむなく一時 SE の我に立ち帰るが、船長が行ってしまうが早いか、約束も忘れて直ちに BE の自分へと戻って行くのである。これを見ても、SE が単に一時的に帰還される現実感の稀薄な時間レベルにすぎず、これに対して BE は、SE の Eduard によってその精神を挙げて没入され、そこにおける自分自身に感情移入され尽す時間レベルであり、常に現実感に満ちた刻々の「今」として立ち現れることが確認できるだろう。

このように、SE は単に Eduard の肉体が存在する「今」であり、BE は、SE の Eduard の精神が、その折の自分に同化しつつ刻々の自分の感懐ならびに Stopfkuchen の談話を中心とする周囲の出来事を追体験としてそっくりそのまま再現して見せる「今」であり、さらに EE は、あるいは BE における Eduard の回想がこれに同化しつつ筆記する SE の彼によって再現された「今」であったり、あるいは BE の Stopfkuchen や Titchen が、直接引用を駆使した臨場感溢れる Ich-Erzählung によって描き出す、赤の砦の悲惨な過去にまつわるアネクドートであったりする¹¹⁾。

問題は、これら三つの「今」相互の関係である。BE の Stopfkuchen や Titchen による Ich-Erzählung をなす回顧談を例外として、それ以外の時間現象においてはこれら三つの「今」は互いに干渉し合わず並立している。だからこそ、先に見たように、Eduard は EE の回想から一挙に SE の我に帰らせたのである。特に時間現象において主軸をなす SE と BE に限って言えば、上で見た SE の Eduard の時間的移動が如実に物語っているように、新しい

10) S. 162-163

11) 注(5)参照。

「今」(=SE) を定点として古い「今」(=BE) が距離を置いて見据えられることは絶えてなく、従ってこの物理的な「今」(=SE) と Eduard の精神が没入している「今」(=BE) との間に、視点の上での遠近法的な結合関係はないと見なしてよいだろう。こうして、SE なる時間レベルがほとんど実体を持たないものであり、この時間レベルを手掛りに手記の中に「語り手 Ich」の存在を前提してしまうことは全くの誤りであることが明らかになるだろう。

我々は次に、手記そのものの中に分け入ってそこに現われた Ich の視点を具体的に辿ることによって、そこに登場人物 Ich しかいないことを確認してみよう。上で見たように、SE の Eduard の BE への深い没入ぶりから推して、彼がそこに突き離れた視点を持ち込みえているとは到底思えないが、しかしここにおける時間現象の考察は、あくまでもこの小説に現われた視点のありようの大枠を解明しえたに留まり、視点そのものの内在的な分析に取って代るわけにはゆかない。(作家がなぜわざわざ SE なる時間レベルを設えたのかという問題は、作家が読者に仕掛けた「語りのトリック」と関連してくるがこれは後に回す。)

《第二章》 Ich の視点

(一)

Ich の視点の具体的な検討に移る前に、大雑把な作品内容の紹介も兼ねて、この作品の基本をなすモチーフと、作家が秘かに使っていると思われる「語り手の消去」という技法との兼ね合いについて少し触れておこう。ここで言う基本的モチーフとは、〈無知な Eduard 対全知の Stopfkuchen〉というこの作品に一貫している人生上の、そして最終的にはおそらく時代精神にかかわる対立のことである¹²⁾。(ここではさしあたり後者の対立には触れないことにしておく。)

12) Hubert Ohl, „Eduards Heimkehr oder Le Vaillant und das Riesenfaultier, Zu Wilhelm Raabes »Stopfkuchen«“ in: „Raabe in neuer Sicht“, herausgegeben von Hermann Helmerts (W. Kohlhammer Verlag, 1968) S. 247-278, は、Stopfkuchen と Eduard の〈全知対無知〉を軸に据えて、二人の人物の「反市民社会性」

この手記は、Ich である海外での成功者 Eduard が、その無知からくる呑気な優越感を、ドイツの片田舎に蝨居し続けた Stopfkuchen によってほぼ完全に打ち碎かれる過程を描いたものだ。Eduard は、自分の海外雄飛のきっかけを作ってくれた恩人 Störzer が、実は昔世間を騒がせた Kienbaum 殺しの犯人であることを知らない(これはまだ Stopfkuchen しか知らない)。従って、彼は世間から決定的な証拠のみを欠いた実質的な犯人と目され、容疑の晴れぬまま死んでいった赤の砦の農夫 Quakatz が無実であることももちろん知らない。むしろ彼はこの世間の頑なな予断に無批判に与していた。また彼は、過去における Quakatz とその一人娘 Tinchen の悲惨な生活の内情も知らなければ、Stopfkuchen が Tinchen と結婚し赤の砦を取り仕切り始めて以来、砦と世間の関係が大きく転換されたことも知らない。また彼は、少年時代にのろまで呑気に太っちょの食いしん坊ほどにしか見なしていなかった Stopfkuchen が、そもそもいかなる人物であるかも知らない。知らない尽しで Eduard は赤の砦を訪ねて行く。彼はもっぱら、Stopfkuchen がまんまと赤の砦の当主に納って懐手して安隠に暮している様子を目見するのが楽しみだったのである。

これに対して Stopfkuchen はすべてを知っている。赤の砦の悲惨な過去はもちろんのことだが、彼は義父 Quakatz の死後、ふとした偶然を糸口に郵便配達夫 Störzer が事件の真犯人であることを自分一人で突き止めていた。しかし、思うところあって Störzer の死まで真相の公表を差し控えてきた。彼は、Störzer が死んだ翌々日に訪ねて来た Eduard が、乙に澄ました成功者面をして自分の安楽な生活ぶりを覗きに来たことを即座に見抜き、その優越感たっぷりの鼻っ柱をへし折ってやろうと心に決める。それは彼にはほとんど雑作もないことだった。なぜなら、少年時代自分に Le Vaillant の『アフリカ探険

と「市民社会性」の対比性を抽出した優れた論文で、本稿も多くの教示を受けている。そして、Eduard の人物像を Stopfkuchen の言葉の中から探り出す、という優れた手法を用いているが、残念ながら、なぜこのような特殊な手法を必要とするのかについては何も触れていない。私見では、このような謎解きめいた作業が多々必要となるのは、挙げてこの手記の特殊性—自らの備忘のための過去の再現の試み—とこの特殊性を隠蔽しようとする作家の手管とに起因しているように思われる。謎解き以前に、なぜ、どのように謎が成立しているかを問わなければならないと思われる。

記』¹³⁾ の話をして聞かせては海外へ飛び出す夢を育ててくれた郵便配達夫 Störzer が実は事件の真犯人であり、その Störzer の地理的関心とは何のことはない、仕事上犯行現場を毎日通らねばならない苦しさから逃れるための方便にすぎなかったことを Eduard が知れば、彼の人生の根底は揺かずにはいないだろうから。それに加えて、Stopfkuchen には人並はずれた弁舌の才がある。Eduard をさんざんじらした挙句に事件の意外な真相を暴露して痛撃を加えるなどは朝飯前のこと。そして事実、Eduard は Stopfkuchen の筋書き通り、決定的な打撃を受けて故郷の町を立ち去ることになる。

つまり、作家の側から言えば、Eduard は Stopfkuchen にやっつけられるべく終始一貫無知でなければならぬし、Stopfkuchen は Eduard をほとんど全知全能と言っているほど自由自在に手玉に取る役割を果さねばならない。当然、すでに Stopfkuchen にやっつけられてしまった後の船上の全知者 Eduard の方は引っ込めておいた方が効果的だ。(読者に一杯食わすためにも効果的だ、と作家が考えていたらしいことは後に回す。) こうして、Stopfkuchen が Eduard を完膚無きまでにやっつける<全知対無知>という基本的モチーフをより効果的たらしめるべく、全知の後からの語り手は巧妙に消去されていると考えられる。

(二)

手記本体 (つまり BE の記録) に現われた「Ich の視点」は、これを仔細に検討してみると、すべて全く「体験する Ich」=「BE の Eduard」のものであることが明らかになる。この視点は、Eduard が Stopfkuchen から Kienbaum 殺しの真犯人が事もあろうに自分の恩人 Störzer であることを暗示された時点 (S. 162) を境に画然たる相違を示している。その時点までの彼は、Stopfkuchen によって終始手玉に取られ、また自分の生き方・考え方に対する辛辣な皮肉を浴せられもするが、基本的にはまだ友人の真意が読めず、従って海外での成功者としての自負と優越感を失っていない。そしてこの時点までの Eduard (= Ich) の言動と感懐において、この不明に裏打ちされた自負と余有を裏書きし

13) 正確には『アフリカ奥地への旅』。

ないものは何ひとつないといっていいだらう。

我々はまず、Eduard が Stopfkuchen から真犯人が Störzer であることを仄めかされるまでの部分において、Eduard (=Ich) によって発話された言葉と地の文とが、全く相呼応する無知な呑気さを示しており、とりわけ後者には BE におけるその折々の無知な Eduard の感懐しか現われておらず、SE の全知の Eduard の視点が一貫して巧妙かつ周到に伏せられていることを確認してみよう。

赤の砦訪問以前の Eduard の Stopfkuchen への思いは、紛れもなく、少年時代に彼自身や世間がこの人物に対して抱いていた浅はかな先入見そのままである。彼は、宿で往時の回想に耽るうちに赤の砦のことに想到して言う、「当時の私たちの中で一番デブで一番怠惰で一番食いしん坊のこの男と結びついた赤の砦に対するウキウキした快よい気持が私を襲った¹⁴⁾。」(地の文)と。勉強嫌いで食いしん坊だった友人が、左団扇で呑気に暮しているであろう、という予断しか Eduard の念頭にはない。

翌朝、宿での朝食の際に、Eduard はまたもや Störzer と Stopfkuchen への感懐に耽っているが、それもしごく呑気な調子のものである。彼は、「では Störzer は死んでしまったのか?¹⁵⁾」「物悲しくも快よい¹⁶⁾」(傍点筆者)ため息をついたり、また今これから訪ねて行くつもりでいる Stopfkuchen のことを「私の懐かしい愚かな友 Heinrich Schaumann, Stopfkuchen と渾名され善良で感じがよく怠惰で太った健気な友 Heinrich Schaumann」として思い浮かべたりしている。(朝食の際のこの呑気さが示すように、自分自身がこの朝までにかけて、夢と現の間をさ迷いつつ回想した EE のシーンの中で、Störzer がまことに奇妙な言動をしていること¹⁸⁾、また Stopfkuchen が Quakatz の無実を仄めかしていること¹⁹⁾などには、Eduard は全く気にも留めていないこと

14) S. 22

15) S. 29

16) A. a. O.

17) A. a. O.

18) S. 18-19, S. 21

19) S. 28

に作家はしている。ここで作家は、EE のシーンを後からの語り手を介入させずにそっくりそのまま切り取るという技法を使って、多少の不自然さを冒して、一方で BE のEduard の不明な呑気さを保持しつつ、他方でほとんど謎に近いかたちで後の Stopfkuchen による一個の Haudlung としての談話行為への伏線を読者向けに忍び込ませているのである。全く同様のことが、赤の砦の前に立った Eduard の回想に現われる往時の砦の荒れすさんだ様²⁰⁾と、彼の現在の砦へのまことに呑気な観察²¹⁾や同様に呑気な Stopfkuchen への挨拶²²⁾との間に見られる奇妙なズレについても言える。

赤の砦で Stopfkuchen と再会した際の Eduard の挨拶も、少々度を過していると思われるほどうきうきした調子のものである。「突然のお邪魔を許してくれたまえ。ずいぶん昔になるが、君はひとりの友人を Eduard と呼んでいたものさ、もっともそいつは若い男爵ではなくて下の町の郵便屋の小伴にすぎなかったがね、Schaumann²³⁾」。Goethe の『親和力』の冒頭部分をもじった Raabe お得意の言葉遊び²⁴⁾を、ここで作家は Eduard にさせている。これによって、友人との再会を無邪気に喜ぶ彼の様子が浮き彫りにされている。一通り何とか挨拶らしき遣り取りが済むと、彼はため息まじりにこう呟く、「自分が掲げた目標に到達し、到達してしまっただ後もそれに幻滅していない人物についてお目に掛ったよ。²⁵⁾」。ここでも、自らは何らの努力もせずにまんまと安楽な地位にありついたものよ、という彼の友人に対する呑気な予断が見て取れる。(それとは裏腹に、自分は海外で成功したものの必ずしもそれに満足していないという彼の気持は、この手記が自分自身の備忘のためのものであるという前提によって、文字面には現われない。こうした手記としての特殊性が数多くの見通

20) S. 39-41

21) S. 49-52

22) S. 53

23) A. a. O

24) 「エドアルト—こう呼ばれているのは、男ざかりのさる金持の男爵であるが……」(浜川祥枝訳、ゲーテ全集(潮出版社)第6巻、105ページ。ドイツ語原典では“Eduard—so nennen wir einen reichen Baron im besten Mannesalter—” in: Goethe Werke Bd. VI (Verlag C. H. Beck München 1981) S. 242.)

25) S. 60

し難さを生み出している（例えば、Eduard 自身の人生がほとんど一度としてまとまったかたちで説明されることがない、といった事柄。）ことについては次章で論ずる。）

友人と二人で砦の上に立つ。「彼 (Stopfkuchen) は、赤の砦の歴史研究者かつ哲学者として、次第にその偉大で——著しい真価を現わして行くのであった²⁶⁾」。この地の文は、うっかりすると「語り手 Ich」のものとして読み過されかねないが、よく注意して読むとそうではない。なぜなら、Stopfkuchen に痛撃を食わされた後の Eduard、とりわけ今船の上で書いている Eduard には、BE のこの時点では退屈としか思われなかった友人の話の中に、意味深い内容が隠されていたことに気づいているはずで、それを踏まえて改めて上に引用した言葉に目を向けると、そこには広く世界を知っている者が世界の片隅しか知らない者を見下した揶揄の念が含まれていることに気がつくはずである。この文も、やはりその折の不明な Eduard の視点をしか反映してはいない。また、この時の彼には支離滅裂としか思えなかった Stopfkuchen の長口舌に飽きて、友人を「恐しい退屈屋」²⁷⁾と呼んでいる箇所（これも地の文）についても、全く同様のことが言える。

Eduard は、昼食のために家の中へ足を踏み入れようとする時、玄間のドアの上に「ここに神ノアに語りて言給はく、汝方舟を出ずべし」という銘が掲げられているのに気がつく。「それで私が全く驚き呆れて太った男を見つめると、あらゆる肘掛椅子族の中でもっとも呑気なこの男は、悠揚迫らぬ微笑みを浮かべつつ言うのであった、……²⁸⁾」（地の文）。この Stopfkuchen 評も、この時点での Eduard のものでしかない。彼はこの時、この銘を友人の酔狂なおふざけ程度にしか思わなかったのである。しかし、この場面を書いている SE の Eduard には、この銘が友人の生き方を象徴したものであることがすでにわかっているはずだ²⁹⁾。もちろん、書き手 Eduard の視点は伏せられてはいるが、

26) S. 62

27) S. 73

28) S. 75

29) この銘の意味を考えるヒントは、例えば、S. 96 の「畜群の箱から出る」(—heraus aus dem Herdenkasten gehen) あたりに隠されている。

やがて食事も済んで Tinchen を加えた三人で戸外に坐る。Stopfkuchen は、自分が赤の砦に出入りし始めたそもそもの経緯について物語っている最中に、出し抜けに、ちょっと余事に触れるといった調子で、Kienbaum 殺しの真犯人を知っている、と言い出す。これを聞いて Tinchen も Eduard もびっくり仰天する。Tinchen は、それを今すぐ話すように夫に迫る。これに対して Stopfkuchen は、そうあわてずに今までの話を続けよう、と平然と突っ撥ねる。この時はじめて Eduard は友人への不可解さを覚えてちょっと動揺している。「彼 (Stopfkuchen) がなまけ者 (動物一筆者注) 然としてのろのろ木に登って行くにまかせる他はなかった。だが世界を股に掛けて平然と体験を積んできたつもの者にも、この冷血さ加減は次第にとても無気味なものになってきた³⁰⁾」。しかし、Eduard は不可解な無気味さを少しばかり覚えはしたものの、前半の「なまけ者云々」の表現が示すように Stopfkuchen を呑気に見下した態度をまだ失ってはいない。やはりここにも、登場人物 Eduard しかいない。話は飛んで、やがて Stopfkuchen と Eduard は、Tinchen を残して町へ出掛ける。(飛ばした部分の Eduard は、友人とその妻 Tinchen の話に聞き入るばかりで、時折現われる彼の視点も BE の彼のものであることは明らかであって、取り立てて検討するには及ばない。) 町で事件の真相を公表するつもりで Stopfkuchen は、Eduard に、真相を公表してみても町の連中は事の意外さを新しい刺激的な話題として喜ぶだけだろう、と話す。これを聞いた Eduard は、事態の推移をすでに見通しているらしいこの友人が、急に大きな存在に見えてくる³¹⁾ (地の文の要約)。赤の砦上の談話の席では、Eduard の目に、友人が不可解で少し無気味に映ったらしくはあるが、大きな存在として映ったという形跡は全くない。従って、これは彼の友人に対する評価の変化にはちがいない。しかし、事件の真相を知った後のその変化に比べれば、物の数ではない。

やがて Störzer の家がある貧民窟マタイ街に差し掛ると、Eduard は、海外を駆け巡ることに忙しくすっかり忘れ果てていたこの街、恩人 Störzer に連れ

30) S. 95

31) S. 157

られてよく出入りし仲の良い友人もいたこの街を見て、自分の浮き草のような根のない生き方への痛恨の念を覚える。この一ページ以上にもわたる長い地の文 (S. 159-160) はすべて、その折の Eduard の内心に去来したものを表現した内的独白 (Innerer Monolog) と見なして差し支えないだろう。この部分などは、この手記には地の文にすら「後からの語り手」はほとんど全く顔を出さないことを明確に示す一番よい見本と言えよう。

(三)

そして Eduard は、ついに、それも Störzer の棺の傍らで、この今は故き恩人が Kienbaum 殺しの真犯人であることを、Stopfkuchen から知らされる。我々は、今度は、こうして自らの不明を暴かれた後の Eduard のありようを辿り、そこにもやはり、BE におけるその折々の彼の視点しか提示されていないことを見届けたいと思うが、そこへ移る前に確認しておかなければならないことがある。それは、この Eduard の不明の露呈を境として、作家が秘かに用いている「語り手の消去」という技法のもつ意味が全く変る、ということである。すなわち、この分岐点に至るまでの部分では、「語り手の不在」は、ひとつには、登場人物 Eduard の「無知」をそのまま放置し、かつ Stopfkuchen の「全知」を隠蔽しておくことによって、この分岐点における「無知」対「全知」の衝突を劇的な緊張にまで高める機能を果している³²⁾。また今ひとつには、それは、読者の視点を無知な Eduard の視点へと終始囲い込み、囲い込むことによって Stopfkuchen の言動の真の意味を読者に対して隠蔽する役割を果しており、それはさらに、作家が読者の無知とその殺人事件への興味とを Stopfkuchen による真相 (犯罪というよりは事故に等しいつまらない事件) の暴露まで巧妙に繋ぎ止めておいて、この暴露によって一挙に読者の期待を挫く上でも重要な任務を帯びていると思われる。(この、分岐点までの「語り手の不在」のもつ二番目の機能については、「語りのトリック」の項で改めて論ずる。)

32) Hubert Ohl は、ここにおいて Eduard の盲目的な自信と Stopfkuchen の真相暴露が「ほとんど耐えがたい緊張感を伴って」衝突している、と述べている (A. a. O. S. 260)

だが、この分岐点の後、登場人物 Eduard はもはや「無知」ではなく、「語り手の不在」は彼を無知に留め置く任務を果し終えているが、別の任務がそれを待っている。Eduard は Stopfkuchen と別れ、この友人の謎めいた言動全体とともに一人取り残され、翌日悄然と町を立ち去るのだが、その間に彼が巡らしている、あるいは苦しい自己正当化を滲ませ、あるいは Stopfkuchen 風に韜晦する切れぎれで不透明な省察は、語り手が不在であることによって、断片的で不透明なまま、Stopfkuchen の謎めいた言動全体を解き明かすためのヒントとして、読者に手渡されるように思われる。

さて、この分岐点の後の Eduard のありようを辿って、その視点が BE の Eduard のものであることを確認してみよう。彼は、Stopfkuchen から Störzer が真犯人であることを知らされて、「ほとんど世界の崩壊³³⁾」(地の文)に等しい衝撃を受けている。そして、酒場 der Goldene Arm で Stopfkuchen が絶妙な語り口で事件の詳しい経緯を物語る場面では、その折の Eduard が友人の話にほぼ完全に引き入れられているのに応じて、一般にその折々の彼の感懐がそのまま言葉と化す趣きを呈する地の文は、ほとんど全く消え失せてしまう。まれに現われる地の文も、酒場の内部や女給の Meta の様子を提示するための必要最小限の情景描写にほぼ限られていると言ってよい³⁴⁾。

友人の話によって決定的に自らの不明を思い知らされた Eduard は、その衝撃のためにろくに満足な別れの挨拶さえ交せないまま、友人と別れて宿の自室に戻る。そして、その日友人が話した一語一語を反芻し、とつおいつ苦しい省察を繰り返す。翌日、彼は逃げるようにして宿を出て列車に乗り込む。しかし、Stopfkuchen の影は、彼に執拗に付き纏って容易に離れようとしめない。そして彼は、この友人の人生と自分のそれとを引き比べて、明らかに自分のそれが表相を出ない必然性のないものであることを認めざるをえない。この人生の方向喪失の思いは、アフリカへの船の旅の間もずっと彼を苦しめ続けたらしく、ハンブルグ行きの列車の中で自分が静かに目を閉じて Stopfkuchen や Tintchen

33) S. 164

34) S. 165-166. また S. 177. S. 181

のことを思い浮かべている場面で手記を打ち切り、デッキに出て他の船客と共に Tafelberg を眺めやりながら、SE の彼自身がこう呟くのである、「Eduard、これは一体どうしたことだ？お前はまたここへやって来たのか？」³⁵⁾と。

Stopfkuchen と別れた後の Eduard の行動はほぼこのようであったが、この間の彼の胸中は、上で見たように、手記を閉じて一人の旅人に戻るまで一貫して変りがないように思われる。すなわち、表現のありようはまちまちだが、その根底に流れているものは、一貫して、Stopfkuchen のあくまでも己れに深く根ざした人生への讃嘆であり、逆に、Eduard 自身の、表面的には聞こえは良いが、事件への浅はかな予断が示すように、社会通念に囚われ己れ自身に根ざした方向性を欠く、内面的に貧困な人生への慙愧の念である。従って、Stopfkuchen と別れた後の Eduard の視点が、手記を書き終えた時点に至るまで、一貫して自らの人生への慙愧の念で染め抜かれている以上、我々は、もはや我々の問題—この手記には語り手 Ich の視点は終始伏せられており、登場人物 Ich の視点しか見出せない、ということの論証—に、例の分岐点以前におけるように、BE の Eduard の視点と SE の Eduard のそれとを照合するという角度から接近するわけにはゆかない。この手記最後の部分にも BE の Eduard しかならず、SE の彼の語り手としての介入がないことは、むしろそこにおける彼の省察が、ただ単に謎めいた暗示として提示され、かつそのまま放置されるという、その提示のされ方に現われていると思われる。すなわち、それらの省察は、肝心な部分が Stopfkuchen 風に自己韜晦した表現によって提示されたり³⁶⁾、またそこに Eduard の苦しい自己正当化が入り込んだりして³⁷⁾、まるでその省察自身の未成熟と省察者の激しい心の揺れ動きを示すかのように、まことに断片的で不透明きわまりない。例えば、彼は、Stopfkuchen と別れた後一人宿で苦しい省察を巡らすか、その省察がそのまま夢の中に持ち込まれ、しかもその夢の中で彼自身が完全に Stopfkuchen と化して言っている、「おれたち (Stopfkuchen と Tinchen) は、もう一度この昔ながらの巢か

35) S. 207

36) S. 197, S. 204

37) S. 197-198, S. 204

ら、あの痩せこけたアフリカ人を、あの Eduard を圧倒してやろう、そして赤の砦からだって、あらゆる俗物的な世界観の頭を足で踏みじることができると、ということを奴に実地で示してやろう。おれたちはひとつ奴に示してやろう、若くして一人垣根の下に置き去りにされ、またそこに踏み留まり、魂を満たすためには Tinchén Quakatz を捜し求め、まるまるした肉体を保つためには赤の砦を征服し、閑な折には、過ぎ去った昨日という日を、まるで何千年も地中に埋れているマンモスの骨のように掘り起す、というような人間にとって時間と永遠がどのような形をなしうるかということ³⁸⁾」。詳しい解釈は後に譲るとして、ここで Eduard は、この日一日 Stopfkuchen が自分に対して示し続けた不可解な言動の意図と、この友人の生き方の根底とに思い至っているのである。また彼は、翌日列車の中で次のような謎めいた省察を巡らしている。窓外を故郷の町の懐かしい一切のものが駆け去って行くが、あの Stopfkuchen はどうだろう。「いや、この男はそうではなかった。それどころか昨日以来、私の故郷での滞在全体がこの太った人物の回りに群がり寄っていた。彼ら (Stopfkuchen と Tinchén) は、垣根の下を一步も離れず故郷に踏み留まりながら、ちょっとしたことを体験し、それをすばらしく晴れやかで明るい魂の中で片付けてみせた。人間は、脂肪と穏かさと静けさとを頼りに、筋骨逞しく痩せていて落ち着きのない征服者気質に対して、一步も後へは引かぬ力をいまだもって失ってはいなかった。Stopfkuchen の異名を取る Heinrich Schaumann は、このことを私にたっぷりと思い知らせてくれたのだ³⁹⁾」。ここで、Stopfkuchen の人生と彼自身のそれとが相拮抗するかのようには表現されているのは、単に自らの劣勢を認めたらぬ彼の矜持がそう言わせているにすぎず、両者に冠された対蹠的な象徴⁴⁰⁾を見れば、彼が自分の人生の貧困をほぼ認めているこ

38) S. 197

39) S. 204

40) この小説では、食物、またその結果としての肥満が、内面的な自己充足の象徴として使われている。この点については、第四章で改めて論ずる。また、この小説における象徴構造については、Hans Meyer, "Raum und Zeit in Wilhelm Raabes Erzählkunst," in: Raabe in neuer Sicht (W. Kohlhammer Verlag 1968) S. 113-114 を参照されたい。

とがわかる。また、彼が、ここで Stopfkuchen の、ないしは Stopfkuchen に託した作家のレトリックを用いて、ということとはつまり Stopfkuchen の視点に同化して、その視点から自らの人生に苦しい裁断を下している、ということもわかる。だが、ここでの問題は、このような彼の謎めいた省察の謎解きをすることではない。問題は、こうした謎めいた省察が事程左様に提示されかつそのまま放置される、という事実である。そしてさらに問題は、こうして Eduard の省察が断片的で謎めいた暗示のまま放置されるのは、語り手が全くそこに介入していないからである、という仕掛けである。またもや元凶は、「語り手の不在」である。

Eduard は息子たちが旅の土産は何かと問うであろうことを想像しつつこの小説から退場する。研究者の中には、その土産とはおそらくこの手記であろう、と述べている人もいる。⁴¹⁾面白い考えだが、管見では、これをもう一步進めて、この手記が手渡される息子たちとは、実は読者のことなのではないかと思われて仕様がなない。例の分岐点までの Stopfkuchen による実に謎めいた言動全体は、「語り手の不在」という技巧によって、それに「無知な Eduard」の視点しか対置されなかったので、いまだ累々たる謎の山をなしたままである。そして分岐点の後やっと「無知」を解除された Eduard による省察も、やはり「語り手の無介入」という技巧によって切れぎれで不透明な暗示のまま放置された。だがそれらの暗示をよく検討してみると、Stopfkuchen の言動全体の謎を解くにほぼ十分のヒントの観を呈しているのがわかる。だがそれはあくまでもヒントに留まる。「無知な Eduard」が単に不可解で不快なものとして放置した Stopfkuchen の謎めいた言動は、これらのヒントによってすぐに理解されるにはあまりに龐大かつ難解である。これらのヒントを手掛りに、読者が独自に考察を加える以外に道はない。この手記が手渡されるであろう Eduard の息子たちとは実は読者なのではないか、と考えるのはこのような理由による。

41) Ulf Eisele, "Der Dichter und sein Detektiv, Raabes »Stopfkuchen« und die Frage des Realismus" (Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1979), S. 74

我々は、次に、この手記が語り手の視点を伏せた BE の再現という技法を採用していることを証明するいくつかの徴表、ならびにこの再現という手法から帰結するこの手記の一種奇妙な韜晦構造へと論を進めるが、その前にこの手記に現われた「Ich の視点」に関連して付論的に言い添えておかなければならないことがある。

(四)

ここで、付論的に述べておかなければならないことは、地の文に現われた、Kienbaumsmörder (Kienbaum の殺害者)、ないしはそれに類する表現の問題である。こうした表現を丹念に調べてみると、作家がそれを特に登場人物 Eduard の事件に関する無知と偏見を示す目印として秘かに使っていることがわかる。

これらの表現は、この小説の中でまことに頻繁に使われるので、まるでそれらがそこを亡霊として徘徊しているような印象を与えるほどだ⁴²⁾。(この現象は、とりわけ作家が読者を故意に誤読へ導いてからかいた試す、というこの小説の秘められた問題レベルにおいては、作家の仕掛けた「語りのトリック」の重要な一角を占めるが、これは後に回す。)これらの表現は、Eduard や世間によって、また Stopfkuchen によっても、はては Tintchen によってさえも発せられるという一種奇怪な様相を呈している。Eduard や世間によって使われる時、それらは、Quakatz が Kienbaum 殺しの犯人であることを信じて疑わない先入見を意味する。とりわけ世間の連中によってこれらの言葉が発せられる時、そこには田舎特有の頑迷な遍狭さが漂い、それらがほとんど Quakatz の本名同然に罷り通っていた事情を窺わせる⁴³⁾。Stopfkuchen は、最初のうちは世間の先入見に与する Eduard を挑発するためにそれらを連発して一応世評に韜晦しているが、真犯人は別にいるという例の爆弾発言⁴⁴⁾をした後の彼によ

42) Hans Meyer は、こうした表現を、この小説に現われた種々の反復表現のうちの、内容的に何も付け加えない類の反復の範疇に入れている (A. a. O. S. 116) が、そうではないことは以下で証明されよう。因みに、Meyer も、この手記の特殊性と作家によるその意図的な隠蔽を見通していない。

43) S. 132, S. 144

44) S. 93

るそうした表現からは、世間の浅はかな予断と偏見へのあからさまな軽蔑以外の何ものも伝っては来ない。さらに Tinchen が使う時、こうした表現が、自分たち親子に惨酷な過去をもたらした世間への激しい怒りや敵意と化すことは言うまでもない⁴⁵⁾。

さて、手記の中の地の文について、その使われ方を多少詳しく検討してみよう。上で述べたように、Eduard 自身も世評を鵜呑みにしてしままで Quakatz を犯人と信じ込んできた。赤の砦訪問以前の宿での彼の回想の中に、Quakatz は最初から「邪悪な農夫⁴⁶⁾」として登場している。彼はまた、砦の前に立って堀を貫く道を眺めながら、かつては「Kienbaum がこの人間の手に掛って殺されたにもかかわらず⁴⁷⁾」馬車や家畜が往来しそれなりに活気があったのに、今ではすっかり草に蔽われてしまっているその様変りに驚いている。さらには、砦で友人夫婦に再会した後、Tinchen が Stopfkuchen に昼食の用意をするように促されて席を立つ際のその好ましい姿に打たれて思う、「彼女はスッと席を立って行った。そして、人殺しの娘に生まれて、Kienbaum を殺した人間の娘に生まれて、今もまた殺しを胸に抱いている（鶏を絞ることを意味する——筆者注）一人の女が、その際、これ以上に真心を込めてこれ以上に気持よく、私に会釈をして私を今日の昼食に迎える喜びを顔に表わすなどということはありえなかった⁴⁸⁾」。ここでは明らかに、友人が当主に納まっている現在の赤の砦に自分は今ついに客として坐っている、という彼のうきうきとした見当はずれの喜びと、その事件への無知と偏見とが溶け合っている。そういう彼を見通してでもいるように、Stopfkuchen は自分の話の中で Quakatz を Kienbaum の殺害者と称し続ける⁴⁹⁾。これは実は、Stopfkuchen が彼の浅はかな無知と偏見を放置、いや意地悪く増幅しているのである。しかしながら、Stopfkuchen が、真犯人は Quakatz とは別人物であったという例の爆弾発言をした後、地

45) S. 110

46) S. 23

47) S. 50

48) S. 58

49) S. 99, S. 143, S. 147. その他「殺し」や「殺人事件」を意味する表現は枚挙に暇がないほど現われる。

の文から Quakatz を Kienbaum の殺害者と呼ぶ表現はふつつりと姿を消してしまう。この事実から、作家がこれらの表現を、事件への Eduard の無知と偏見を示す目印として、秘かに使っていることがはっきりとわかる。この点からも、一船に地の文の中にも登場人物 Eduard しか存在せず、SE の全知の Eduard は慎重に姿を隠していることがわかる。

もっとも、Eduard が、世評に韜晦することでかえってその無効性を際立たせる Stopfkuchen 風の表現をすることも、二、三あるにはある。そのひとつは、酒場 der Goldene Arm での Stopfkuchen による事件の真相暴露が、いよいよ Störzer の白状の場面を迎えようとしている矢先の地の文に見出される。Eduard は、Stopfkuchen の話に耳を傾けつつ、同時に Störzer がアフリカの風物について語るのを聞いているような錯覚に襲われる。Stopfkuchen に問い詰められる Störzer の姿と少年時代に自分の年上の友人であった Störzer の姿とが、Eduard の内心で二重写しになっているのである。この時の地の文に、Stopfkuchen を「人殺しの農夫 Quakatz の相続人⁵⁰⁾」と称している表現がある。この時点までの Stopfkuchen の話によって、すでに、Störzer が真犯人であることにほぼ疑問の余地はないはずだ。従って、Quakatz が「人殺し」ではないことがまさに判明した時にあえてそう称することは、もはや Quakatz のことを問題にしているのではなく、逆に彼にそのような烙印を押した世評そのものを、しかもその愚かしくも醜悪な正体を暴き出し際立たせることに他ならないだろう。この時 Eduard が、世評に易々と与してきた自分の愚かしさを裁く気持と自分の中に生き続けている Störzer への友情との相克に苦しんでいることは想像に難くない。そしてこの「人殺しの農夫 Quakatz」という表現は、この時の彼の己れの不明を恥じる気持を暗示する上で十分な効果を発揮していると思われる。S. 93 における Stopfkuchen による爆弾発言以後、地の文の中で Quakatz を「人殺し」呼ばわりしているのはただこの一箇所のみであり、しかもそれは、今述べたように、この時点での登場人物 Eduard の複雑な内心を Stopfkuchen 風に、しかし selbstironisch に自己韜晦して表現したも

50) S. 184

のと考えられる。

ところが、この種の表現の中ではほとんど唯一の例外として、よほど細心の注意を払わなければ見分けがつかないながらも、SEの書き手 Eduard が——手記の中に自分がいるように見せ掛けながら、その実一貫して身を隠し続ける SE の書き手 Eduard が——その狡猾な尻尾をチラリと見せて遊んでいると思われる箇所がある。それは、例の Stopfchen による爆弾発言に遙かに先立つ箇所である。そして先立つ点にこそ問題がある。すなわち、この種の表現は、これまで見てきたように、基本的にはこの Stopfkuchen の発言に至るまでの事件に対する Eduard の無知と偏見を示す秘かな目印として機能しているが、この問題箇所ではそれ以前に全知の Eduard がチラリと姿を見せてこの機能を自らほんの少しだけ壊してみせていることになる。

ともあれ、その箇所は、赤の砦の客となる直前に砦の前に立った Eduard が、大学入学前に Stopfkuchen と連れ立ってここを訪れた日を思い起こしている回想の中に見出される。この回想の中で、Eduard は、Stopfkuchen が世間や両親に対する激しい敵意を吐露するのに耐えきれず、今空を染め尽している美しい夕日を持ち出して話題を転じようとする。これをかえって逆手に取って、Stopfkuchen は、晴れて親から解放される今、息子に出世のための苦学を強いる父親を、その窓ガラスが美しい夕日を反射している地方刑務所に放り込んでやりたいとは思わないか、と続ける。問題の箇所はこれに続く部分にある。こんな調子で話す Stopfkuchen を一層勢いつかせたのは、「それは上品で躰が良く最も優秀な卒業成績を手にした郵便局の Eduard ではなかった。それは、その男が Kienbaum を殺したことは残念ながら単に実証できなかったまでのことで、そのためにこの世からではないにしろ近隣から締め出しを食らい—両者の間にさしたる違いはないが—もちろん、娘をもその道連れにしていると、そんな男を父親にもつ赤の砦の Tinchen Quakatz であった⁵¹⁾」。Eduard が自分のことを述べた前半の部分には、明らかに Selbstironie が見て取れ、後半の Tinchen に関する部分は、書き手が判断を停止して世評をその

51) S. 47

まま提示した体裁を取ってはいるが、その直前に世評の担い手（この場合は自分自身）への Ironie が配されているので、ここでの世評の調子が高い分だけその浅はかな無効性が露出する、という ironische Umkehrung の仕掛けになっていることがわかる。これは、後の赤の砦上での Stopfkuchen の昔語りの中で、Tinchen や Stopfkuchen に石を投げつける近隣の悪童連中が「人類の怒りの告知者⁵²⁾」と呼ばれ、その直後で Quakatz が「Kienbaum の殺害者⁵³⁾」と呼ばれる際の ironische Umkehrung と全く同じ仕組みである。ただし前者において Ironie が自分自身に向けられている点を除いては。こうして、この問題箇所には、全く例外的に、しかし見極め難いほどごくかすかに、ironische Umkehrung の仕掛けによって、世評の無効性とそれに与していた己れの暗愚を暴き出す SE の全知者 Eduard が顔を覗かせていることがわかる。ただし、ここで BE の Eduard の無知をほとんど壊さずに秘かに全知を忍び込ませているのは、SE の Eduard というよりは、むしろ読者への謎掛けを楽しむ作家その人であって、こうして彼はわざとその馬脚をほんの少しだけチラリと出している様子だが、これは後で述べる「語りのトリック」に関連している。(次号へ続く)

52) S. 84

53) S. 85